

---

# マリオ&ルイージRPG 兄弟の冒険日誌。

美怜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

マリオ&ルイージRPG 兄弟の冒険日誌

### 【Zコード】

Z3716M

### 【作者名】

美怜

### 【あらすじ】

ある日キノ王国に訪れたのは、隣国・マメーリア王国からの親善大使。

しかし彼らは、玉座の間で王国を納める姫君・ピーチ姫を襲い、声を奪い取ってしまう！

今こそ、マリオ・ルイージ兄弟の出番。

ふたりがつけた冒険日誌を、読んでみませんか？

## プロローグ 謎の親善大使。

「マメーリア王国より、親善大使の『』到着です」

今日も平和なキノコ王国。

お城の上に、ぽんぽんと花火が上がる。

キノピオが奏でるファンファーレと共に、玉座の前に現れたのは、  
黄色い服を着た二人組。

彼らは、やがて王国を納める美しい姫君の前にたどり着く。

優しげな微笑みを浮かべてそこに佇む彼女の前で、ローブを着た  
老人が、恭しく頭を下げた。

「キノコ王国の発展とマメーリア王国との親交を願い、マメラ女王  
から贈り物で御座います」

しわがれた老婆の声に続き、後ろに控えていた背の小さい男が、  
自分の身長ほどもある巨大な宝箱を持って前に歩み出て、姫君の前  
にそれを差し出す。

差し出された宝箱を受け取るべく、姫君が男に近づいた……その  
瞬間。

宝箱の蓋がひとりでに開き、その中からバネのついた不細工な人  
形が飛び出して。

その人形の口に当たる部分から、緑色の不気味な気体が、姫君の顔目がけて勢いよく吹き出したではないか！

会場内が一気に騒然となる。

その中でただ一人、愉快そうな笑い声を立てた老婆は、今まで身につけていた黄色い服を脱ぎ捨てる。その下からは、黒と紫を基調にした服をまとった姿が現れて。

彼女が勢い良く両手を掲げると、彼女の周囲には、彼女に導かれるように紫色の雷が次々と落ちる。恐れおののき、その場にいた姫君の従者たちは、全員が一目散にその場から逃げだした。

やがて、箱を持っていた小男も服を脱ぐ。服の下には赤いマントを着こんでいた。と、どこからともなく、掃除機のノズルを取り付けたような機械的なデザインのヘルメットがあらわれ、それは男の頭にすっぽりと収まる。

掃除機のノズル部分が動き出し、姫君の周りにもつもうと立ち込めていた気体を吸い取り始める。気体がなくなると、今までせき込んでいた姫君が、やがてばつたりとその場に倒れこむ。

その姿を見降ろし、二人は再びげらげらと笑いだすのだった……。

【 マリオ & ルイージ RPG

兄弟の冒険日誌

】

## プロローグ 謎の親善大使。（後書き）

と、、いうわけで。

初めまして？とこそこそ。

GBAで発売された、初代マリオ&ルイージRPGを、ふたりの語る田記風ノベライズでお送りしていくことと思います。

プロローグは第3者の視点ですが……

自作からは、マリオとルイージが代わりばんこで物語をたどっていく形式になります。

ふたりの愉快な冒険記を、ぜひともお楽しみ下さい！

## 第1話 平和はいきなり破られた。

【Mario Side】

最近、妙にクッパの野郎が大人しい。

今日も相変わらず天気はいいし、姫も町の人も優しいし、湯加減最高だし。厄介なことが何も起こらない毎日つてのがこれほど穏やかだったなんて、ちょっと今までの俺たちには想像もつかなかつたことだな。ううーん、平和だあ。

今ごろ、庭で俺の服を洗濯しているだろう俺の双子の弟・ルイジの姿を思い浮かべながら、俺・マリオは朝風呂を楽しんでいた。  
……おい誰だ、『オヤジ臭い』なんて言つてる失礼な奴は！

うーん、これほど気持ちいいと、思わずムーディーに鼻歌を口ずさんでしまうなあ。

「ううう、ふふふーん」

「き、き、緊急事態です！」

「ん？」

いきなり、開け放つた窓の外から、甲高い叫び声が聞こえてきて。何だろうと思い、俺はちらりとそつちに目を向けた。

声の主は、城にいるキノピオのひとりだった。洗濯ものを干していく途中のルイージと向かい合つてている。凄く慌てるな。……いつもの事だが。

「臨時ニュースはもう聞きましたか！？」

「臨時ニュース？ ううん、何かあったの？ ……って、うわあ！」

返答を聞いてすぐ、ルイージを思いつきり突き飛ばして、キノピオは家の中に入ってきた。「マリオさーーんつーー！」と、さつきより甲高い、耳に直接響きそうな叫び声と共に。

え、鍵はかけてないのかつて？ ふふん、うちだけじゃなく、他の家もいつつも鍵はかけないぜ。何故なら！ このキノコ城下町には、空き巣をするような悪党はただのひとりもいないからさ。これも全部姫のおかげだなあ。

と、まあそれはともかく。こいつはきっとただ事じやないよな、  
と思い、俺はバスタブから立ち上がった。……と、同時に。

「あやあ――――つ――」

もうもつと立ち込める湯気の向こうで、今まで一番高い叫び声

……というか、悲鳴が響いた。

……あ、ヤベ。そういうや、暑いからって風呂場のドア開けっぱな  
しだった。ルイージに「兄さん、はしたないよ！」って怒られそ  
だなー。

慌てて俺は外に出た。……おっと、素っ裸はまざいからせめてパンツだけでもはかないとな。はー、せっかく気持ちよかつたのに。体を拭くのもそこそこにリビングに出てみると、そこには顔を真っ赤にしたキノピオが倒れていた。あーあ、茹でダムならぬ茹でキノコになっちゃって。

俺はいつもより力を抑えるようにジャンプして、キノピオの頭を軽く小突いた。

「おーい、大丈夫かー」  
「ピ、ピーチ……姫。ピーチ姫……が」  
「何!? 姫になんかあつたのか!?!?」  
「……きゅう」

大事なところでのぼせきつたキノピオはとつとつ田を回してしまった。

……直接城に行くしかないか。俺は急いで家の外に向かつて走り出した。

「に、兄さん!? パンツ一丁で何してんの! って言つたか、今キノピオが……」  
「分かつてん! ルイージ、とりあえず服返せ!-!」  
「何言つてんだよ、今干したばかり……って、うわあああ、絡まつてるつてばー!!」

洗濯紐にぶら下がつてたのを無理やり着ようとしたせいか、俺の体には不格好に絡まつたロープが。……そして、服と一緒にルイージも絡まつてゐる。

「あーもう、ほどくの面倒だからそのままついて来い……」

「ええええ、そんなあ～！！」

ルイージを引きずりながら、俺は城に向かつて一目散に走り出す。今、参ります。安心して待つていて下さい、ピーチ姫！！

緊急事態だからか、それとも平和ボケしすぎているからか。こんなときでも、城内は相変わらずのザル警備。キノピオ兵士の姿はほとんど見かけない。それ程城下町が平和な証拠だが……何度もさらわれてるし、今回もそななるかもしれないつてんだからいい加減学習しろよこいつらはつ！

そんな心のツッコミと共に、ようやくたどり着いた玉座の間。ためらいなく、俺は門を一気に開け放つて、玉座の間に駆け込んだ。

……やつぱり！

何故か、涙を滝のように流して泣いている姫の前にいたのは、紛れもなく！

姫をさらい、他国の重要な宝物を盗み、そして俺たちに散々ちよつかいを出し続けてきた、大魔王クッパその人（いや、亀か？）だつたんだ。

立ち止まるためにブレーキをかける。俺はどうにかクッパの前で止まれたが、ルイージはブレーキの勢いでそのまま前に向かつてつんのめつて、クッパの背中に思いつきり激突する。その勢いでクッパも床に倒れる。……あ、紐ほどけた。それはそれでラッキー？  
起き上ったクッパが振り返る。ルイージが慌てて俺の陰に逃げ込んだ。……うわー、すっげー怒つてゐる。

「ンガア～～ツ！！ この大変な時に、またお前たちかつ！！」

「あ？ そいつはこいつちのセリフだぜ、よくも俺のバスタイムを邪魔してくれたな！」

「しかも我輩に不意打ちとは卑怯者めー。」

いや話聞け。

あーもう。そつちはそつちで怒つてるが、こつわはもっと怒つてるんだからなーー。

「ま、マリオさん！ 久しぶりのバトルですね……大丈夫ですか？」  
いや、お前もこんな時に何言つてるんだよ。こちとらこれから戦おつりてのに！

まあ……体がなまつてるのは否定しないが。

「あー……大丈夫大丈夫。心配しなくていいから、何も言わなくていいぞ。すぐ片付けるからやー。」

「そ、そうですか。さすがマリオさん！」

俺の言葉にそう返してきたキノピオの顔は、どこか複雑そうだった。……説明したかったのか？

「……キノピオたちつて、ほんつと兄さんに頼りすぎてるよねえ」  
ぱつりと、冷静さを取り戻したらしいルイージが呟く。うん、俺もそりそろそりつい始めてた……かも。

どうやら、体がなまつてているのはお互い様だつたらしい。

「グ……グゲツ……」

数発目のジャンプ攻撃で、その巨体はあえなく崩れ落ちた。ふふん、ぎまあみる。

……と、思つたら。クッパがいきなり、今まで受けたダメージが嘘のよう、にじつて勢いよく起き上つた！

「うわ、起きた！」

「まだやるつてのか、ここの野郎！」

「ちょ、ちょっと待てー。」

戦闘態勢をとろつとした俺を、クッパが押しとじめる。

「こんな事をしている場合ではないぞー。」

「……え？」

「い、こきなり何言つてるんだよ、そつちから仕掛けできたくせ

「…」

「直属さん…！」

今度はキノピオが声をあげた。

…「どうやらクッパが言つてるのは本当の事らしい。仕方なく、俺は戦闘態勢を解いた。

「大変になりました！ 先程、キノコ王国の隣のマメーリア王国から、親善大使がやつて來たのです！」

「マメーリア…王国？」

行つたことはないが、姫から話くらいは聞いたことがあった。自然にあふれた、すごくきれいなところだつて。

そこから親善大使が來るつてことは、お互に仲のいい国っぽいな。

まあそんな雑学はどうでもいい。問題なのは、今の話だ。

「そ、それで……その人がどうしたの？」

「そ、そいつが……ピーチ姫の『声』を、奪い取つてしまつたのです！」

「…、『声』を……？」

そんな形のないもの、どうやって奪い取ると言つんだらつ。と、疑問が浮かびあがつたとき。

今まで泣いていたピーチ姫が顔をあげて、口を開いたんだ。

…あれ？ 聞き取れない。なんて言つてゐるか分からん…。つていうか、こんな喉が潰れたような汚い声、絶対いつもの姫の声じゃない！

いつもの姫は、もつと澄んだきれいな声をしているの。

と思っていた、その時。

姫の口の中から、何か変な形をした黒い物体が飛び出して。

それは、重力に従つて床に落ちた。と、同時に！ それは、勢いよく火を吹いて、爆発したんだ！

「うわっ！ なな、何！？」

「か、代わりに、姫の声がこののようなバクダン声に……」

「バクダン声って……おわあっ！！」

キノピオの説明の間にも、バクダン声はどんどん姫の口から発せられる。

雜音、爆音、轟音が、耳にびりびりと響いた。

「こんなピーチ姫をさらつたら、我輩の城が壊れるじゃないか！」

「つて、結局それが目的だつたのかよつ！！！」

「当然だ！ 何とかしろ、マリオ！！！」

「な、何とかしろって言われても、声なんてどうすりや……」

失つた声をもう一度復活させるなんて魔法使いみたいな真似、俺にもルイージにも出来るわけない。

と、なれば……。

「マリオさん！ ピーチ姫の美しい声を、取り戻してきて下さい！」

「犯人は、マーリア王国からやつて来ました。きっとマーリア王国に行けば、何か分かるはずです」

「そうだよな。

姫の声つてのが、どういう風にどんな形で盗まれた、というのは分からなくとも、とりあえず声だけでも取り戻せれば、何とかなるかもしねえ！」

「よし、分かつた！ よーし、日々の冒険だな！」

「留守番なら任せてね、兄さん。部屋はちゃんときれいにしておくれから！ 頑張つて！」

「おう、任せとけ！」

「ガハハハハ！ だつたらさつさと犯人捕まえて、ピーチ姫の声を戻すだけのことよー 我輩の『カメジエット』を使えば、マーリア王国までひとつ飛びだ！」

「うわ、着いてくる気だよこいつ。

何度も戦いあつてるし、こいつと一緒に戦つたことも実際結構あるし、俺の目から見て強いのは確かだけど。……正直、姫のために

俺といいつが協力するつて言つのは、世間の耳から見てビリなんだ？

「……え～。マジ？」

「なんだ、その嫌そうな顔は！」

「そりや、実際嫌なんじやないの？」

「おお、言つようになつたなアルイージ

「ええい、ごくちやくちや言つでない！――

顔を真つ赤にして怒つてる。

意外と寂しがりなのか？…………いや、こいつに限つてそんなことは。

俺たちに向ひなあつて、クッパはびしつと命令した。

「マリオ！　出発の準備をしろ！――

……その後。

大量に発せられたバクダン声によつて、玉座の間が半壊する」とになつたのは……また別の話だ。

## 第1話 平和はいきなり破られた。

【Mario Side】（後書き）

実際にゲームをプレイし、台詞をメモしながら書き上げました。  
最初はマリオ視点です。

プレイ済みの方なら分かるかと思いますが、最初のマリオとキノピオのやりとり。鼻歌を歌うのとキノピオが風呂場に入るの、逆なんですね。

書いている途中で、何となくこっちのほうがつじつまが合つかな？  
と思って、ちょっとぴり書きかえてみました。  
こつちはこっちでいい……かな？

## 第2話 なりゆきの旅立ち【Luffy Side】

突然決まつてしまつた、僕の双子の兄さん・マリオの旅立ち。兄さん、いつも言つてるんだよねえ。「体をはつて戦うのは俺だけいい。お前は何も心配しなくていいから」つてさ。失礼だな、一応僕だつてちゃんと戦えるんだよ!……怖いけど、ね。

まあ、こんな話は今度でいいとして。僕、ルイージは、キノコ城の中にある滑走路の入り口で、兄さんを待つていたんだ。

本来なら、ここは姫の自家用機があるんだけど……今は、クッパのカメリージェットに占領されてる。いつも乗ってるピエロみたいな船といい、クッパって……美的感覚あんまり良くないよね?

……あ、来た来た! 兄さんだ。

「よう、ルイージ!」

城にいるキノピオたちに挨拶してきたらしい。旅立ちの準備もばっちりみたいだ。

「クッパ、もう滑走路のほうに行つてるよ

「お、そうか。じゃあ早く行かないとな」

ふたりで滑走路のほうに向かつて歩き出す。あ、ここにもキノピオたちがいるね。

兄さんの姿を見るや否や、嬉しそうに話しかけてきた。やつぱり兄さんは人気者だねえ。

「ついこの間、マメーリア王国に旅行をしてきたの。ウフフな山に、ゲラゲラな森に、クスクスな海に、テヘヘな砂漠と、見どころ満載な国だつたわ!」

「……何だそりや。訳分からん

「ホントに自然にあふれた国なんだねえ」

「突つ込むところ違うだろ……」

「マリオ殿——!」

急に後ろから、ものすごい大声で話しかけられて。

びっくりして振り向くと、茶色いースーツケースに乗つて、じつに向かつて全力疾走して来るキノピオの姿があつた。

あれは……ピーチ姫に仕える大臣、キノじいだね。

僕たちの前で止まつたキノじいは、乗つていたスーツケースから飛び降りて、「なんとか間に合つたようですね」って言つて、どこかほつとしたように笑つた。

「マリオ殿のために、長旅にもつてここのスーツケースを用意致しましたぞ！ アイテムや着替えが沢山入れられて、とーつても便利！ 持つて行つて下され」

「わあすごー！ きっと新品なんだろう、どこもかしらも磨いたみたいにピカピカだあ。

「おお、サンキュー！」

「よかつたね、兄さん」

「さて、渡すものがもうひとつ。旅の資金として、これをどうぞ」えつ、まだあるの？ しかもお金？ わあ、さすがキノじい。姫の事となると、心配でたまらないんだね。姫は、なんだか迷惑そうにしてたみたいだけ……。

キノじいが懐から、ずつしり重そうなコイン袋を、兄さんに手渡した。

「ひーふーみー……うわ、100コイン！？ こんなにいいのかよ」「もちろんですとも、他ならぬ姫様のためですからな。……おや、ルイージ殿。ルイージ殿もマーリア王国へ行くのですかな？」

「えつ？」

うーん……

本音を言えば、僕も一緒に付いて行きたいんだけど。

あんまり戦い慣れてないし、兄さんに迷惑かけたくないしなあ。

……ちよつぴり怖い、っていうのもあるんだけどね。

「いえ、僕は見送りです」

「おお、ならばジイと一緒にですな。マリオ殿！ 先に行つて、カメジゴットの前で待つておりますぞ」

「ああ」

兄さんに頷き返して、キノじいは滑走路のほうに向かつて歩き出す。

「元気なじいさんだよなあ。姫の事となると余計にさ」

「それほど心配してんのだよ」

「そいつは俺だって同じだよ。こいつちは心配しなくていいから、留守番しつかりな」

「うん」

大きく僕は頷いた。

「マリオーーー！」

滑走路の上に、どーんと陣取るカメジエット。

デッキのほうから、クッパの怒鳴り声が聞こえる。……もしかして、すつじく怒ってる？

「遅いーーー！ 何してたんだーーー！」

「仕方ないだろー、広場でキノピオたちに落し物を探すの頼まれたりしててさあーーー！」

兄さんが怒鳴り返す。僕が待ってる間、そんなことしてたんだあ。兄さんらしいや。

「出発するぞ！ 早く乗れ！」

「あー、はいはい」

兄さんが、地面を蹴つてデッキに軽々と飛び乗った。

さつすが。このジャンプを見て僕たちだと分からない人はいないつてぐらい、僕たちのジャンプは有名だからなあ。ジャンプ力だけなら僕でも結構あるんだけど、フォーメーションとかパワーは兄さんのほうが凄いや。

「どうだ、凄いだろーーー！ これが我輩の最新兵器、カメジエットだ

！！」

「んー、まあな。…… 実際こいつと戦うのは勘弁したいが

「ウム」

兄さん、それって褒めてるの……？

でも、ケツハは満足そうに頷いてる。う、嬉しいんだ……。

卷之三

「あとは我輩の手下の…………クッパ軍団、集合！！」

あ、そろそろ離陸するのかな？ 兄さん、行ってらっしゃーい！  
僕は帽子をとつて、兄さんたちに見えるようにはたばたと振った。  
……あれ、来ない。僕たちより先に来てたノコノコが一人いるだけだ。

迷ってるのかな?  
この城、広いんだよね。  
僕も初めて来たとき  
は……。

「そうかそうか！ そんなに連れて行つて欲しいのか！」  
満面の笑みを浮かべてる。帽子を振つての僕に向かつて……

え？ あれ？

「 そ う だ ！ お 前 だ ！」

慌ててぶるぶると首を横に振った。僕、ただ見送りに来ただけなのにー！

遠慮なんかしてないってば――――――

「こちら、待て!!」

後ろからの怒鳴り声に聞こえないふりをして、僕は城門目がけて一気に駆けだした！

……そしたら、同じようにひたむきに向かって走つて来る団体を見つけて。

「うわあー！」

「クッパ様！ 軍団ただいま到着しました！」

そのまま、思いっきり正面衝突して。あえなく、元いた場所にはじき返されてしまったんだ。

「おーい、集合場所はこっちだぞーーー！」

先頭に立っていたノコノコに呼ばれて、他の軍団員たちがどんどん集まつていいく。広場が軍団員でこつたがえして、もう大騒ぎ。

……どうやら紛れて、逃げられるかな？

と思つてたら……わー、カメジェットが追つかけてくるーーー！

空飛ぶ戦艦相手じゃ、流石に競争には勝てない。

伸びてきたマジックハンドに捕まつて、僕はあつと/or>う間にカメジェットの中に押し込められてしまったんだ。

あーあ、いつたい何でこいつなつちやつたんだろ？。僕が悪いのかな？

……でも。

今度は兄さんと一緒に、見知らぬ国をあちこち旅できる。  
そう思つと……

ちよつとだけ嬉しい、かな？

## 第2話 なりゆきの旅立ち【Leaving Side】（後書き）

今回はルイージ視点でお送りしましたー。

ゲームでは、行きたくなかったルイージが無理やり連れて行かれた、  
という描写で描かれていて、多くのプレイヤーがここで笑ったこと  
でしょう。

でも個人的には、ルイージがいつも留守番ばかりなのは、マリ  
オなりの思いやりだつたらいいなあ、と。

そして、ルイージもそれを分かつているうえで、ついて行きたか  
たんじやないかなあ、と。

勝手な想像ですが、それを形にしたくて、今回の話はいつも形に  
なりました。

いかがだったでしょうか？

あの大騒ぎから、どれだけ時間が経つんだろう。なりゆきでついて来ることになつてしまつたルイージを迎えに、俺は格納庫に来ていた。

大丈夫か？」

何でこんなこと……

うわー、すこいえいしてたる。そんなにこして来たくなかったのか？ それはそれで傷つくんだが……。まあ俺としては、血のつながつた双子の弟であるルイージをあまり危険な目に逢わせたくないかつたわけで、結構複雑な気分なんだよなあ。

「冗談じゃないし、本人も絶対嫌だろうし、クッパは後で説得しておこう。そう思った直後、天井に取り付けたスピーカーがぶるぶると震えだした。

『えへ、艦内にいるマリオと……縁のヒゲ！』  
スピーカーから聞こえてきたのは、クッパの手下が流す艦内放送  
だった。

『 もうすぐマーリアに到着だ！ 荷物を整理したら、速やかにテ  
ッキまで来るよつてー！』

「緑のヒゲって……僕のこと?」

がつくりとうなだれている。うん、俺も落ち込みたい気分だない  
いくらあんまり冒険に出ていないと云は、名前覚えられてい  
ほドルイメージの影が薄かつたなんてさ。これも後でクッパによく念  
を押しておこう。

ほら、いつまでもいじけてねーで、行くぞー

תְּהִלָּה

ぐすんと鼻をすすり、体育座りしていたルイージが立ち上がる。俺もそれに続いた。

クッパの手下の仕事を手伝つたりしながら、デッキへ上がる階段までたどり着いた俺たち。

まず最初に目に飛び込んできたのは、通路を占領しているでつかりタルだった。

「誰だ？ こんなとこに荷物を置いたのは… これじゃあデッキに出られないぞ！」

手下のノコノコが困つてゐる。うーん、こんなにでつかいの、俺たちのジャンプでもどびこせそうにないし。壊したらクッパにすつごく怒られそうな気がする。とは言え、俺たちもデッキに行かなきゃいけないしなあ。

一人で頭をひねつて考えていると、ふと、視線の端に、ブロックがあるのを見つけた。

好奇心に導かれ、軽くジャンプしてブロックを叩いてみると、ブロックと連動して、クレーンがこっちは向かつて動き出した！ おお、ひょっとしてこれなら行けるか？ わくわくして、俺たちはクレーンの動きを見守つた。

すると、クレーンがルイージの頭上で、いきなりぴたつと止まつてしまつたんだ。

「あれ？」

「おかしいな、故障か？」

もう一度ブロックを叩いてみようかと思つた、その時！

クレーンが突然動き出し、ルイージの頭にがつしりとかみついた！ つて、生き物とは違つが。

「おわ！？」

「うわ、わあーっ！…」

ばたばた暴れるルイージをものとせず、クレーンはそのままデッキのほうに行つてしまつた。あっしゃー……。

「あーあ、荷物と間違えて連れてつちやつたみたいだな。せつかくだから、監視係にでもするか……」

せつかくだからって何だよオイ。

デッキに上つて来てすぐ、俺は弟の件についてクッパの説得を試みる。

「なるほど、我輩の勘違いだつたか。仕方ない、縁のヒゲは一日入団といつことにでもしておくれか……」

「いや、だから『縁のヒゲ』じゃないっての」

「やかましい！ 類似だらうが縁のヒゲだらうが同じことだ」

失敬な。俺の弟に向かつてなんつー事を。

文句の一つでも言つてやろうかと口を開きかけた時、いきなり俺たちの間にノコノコが割り込んできた。

「クッパ様！ もうすぐ、キノコ王国とマメーリア王国の国境付近を通過致します！」

「うむ、御苦労。下がつていいぞ」

クッパの言葉に応えるように、びしっと敬礼を一つして、ノコノコは足早にその場を立ち去つた。

「うーむ……ここだけ見ると、こいつが手下たちにどれだけ信頼されてるかってのが分かるなあ。ちょっと複雑だが。

と、その時。

「う、うわああー！」

俺たちの頭上で、クレーンにぶら下がつて双眼鏡をのぞいていた

ルイージが、突然騒ぎだしたんだ。

ひどく慌てる。なんだなんだ？

「ルイージ？」

「むむむ？ 何をそんなに騒いでいるのだ」

「む、向こうから何か変なものがつ」

ルイージが言い終わるより速く。

どこからともなく緑色の球が飛んで来て、それがカメジエットに直撃した！

「うわー！」

その衝撃でクッパが転んで、ルイージがクレーンから落ちる。…

…あ、クッパ踏まれた。

「な、なんだ！ 何が起こったのだ！？」

「分からぬよ、突然……」

「……むうつ！…」

困惑する俺たちを前に、クッパが何かに気がついた！ デッキの突端のほうを睨みつけている。何か見つけたのか？

……ん？

空の向こうから、何かが飛んでくる！

氣味の悪い緑の顔をした二人組。片方は、空飛ぶ椅子に乗った婆さん。もう片方は、妙なヘルメットをかぶったメガネ男。

……雰囲気で、分かる。

ふたりとも、クッパなんかよりもっとずつとタチの悪い、すっつげえ悪い奴！

そいつは俺たちの目の前で止まると、「ゲヒヤヒヤヒヤ……」つて、耳障りな嫌な声で笑つて、言つたんだ。

「このゲラゲモーナ様に追いつこうなんて、10000000000年早いんじゃ……」

なんだって？

その口ぶりからすると……まさか…！

「お前が、ピーチ姫の声を盗んだ犯人だな！」

「ゲヒヤヒヤヒヤ！ その通り…！」

「「なつ！？」

クッパの言葉に、悪びれることなく堂々とそいつは言つた。……やつぱり…！

こいつがこの騒ぎの張本人。俺たちのお守りするべき姫をあんな不自由な目にあわせて……くそつ、許せないっ…！

怒りのあまり、言い返すのも忘れてただ唸つてはいる俺たちに向か

つて、ゲラゲモーナは勝ち誇ったようにげらげらと笑つた。

「さつそくマメーリアに帰つて次の作戦を開始するんじゃ！　お前たちの相手をしている暇はなーいっ！」

そう一気にまくしたてると、ゲラゲモーナはぐるりと後ろを振り返つて。

「ゲラゴビッシー！　やつておしまい！…」

彼女の後ろで、何も言わずにただニヤニヤしていたメガネにそう命じ、夜空の向こうに飛び去つてしまつた！

「ンガア～！　待て～つ…！」

クツバが吼えるも、ゲラゲモーナの姿はもうそこにはなく。代わりに、その場に残されたメガネ男だけが、ゲラゲモーナそつくりの下品な声で高笑いした。

「フレはゲラゲモーナ様の一番弟子、ゲラゴビッシーである〜！　ピーチ姫の声を盗まれたぐらいで追いかけてくるなんて、暇るるね！」

「『ぐらり』だと…？　ふざけんな…！」

「……っ」

「こんなの挑発だつてぐらい、俺にもルイージにも分かつて。でも怒りがおさまらない！」

事件が起きてすぐ、犯人に思いつきりバカにされるなんて…

「そんなに怒らなくとも、これからもつと恐ろしい事が起ころるよ！」

「恐ろしい事？　……『計画』とかなんとか言つてたし。姫の声なんか盗んで何をしようとしてるんだつ…！」

「ゲヒヤヒヤヒヤ、そんなの教えないよー　とりあえず、お前たちはここで消えてもらつるよ…！」

ルイージの言葉に、のらりくらりとそう答えたメガネ男…ゲラゴビッシーのかぶつていた、掃除機をくつつけたようなみょうちくりんなヘルメット。それが、彼の言葉と共にいきなり動き出した。

掃除機のノズル部分から飛びだしたのは、さつきカメジョットに

ぶち当たつた緑の球！

俺たちが構えるより早く、それは俺たちの両脇をすり抜けて、クツパを吹つ飛ばした！

「ぐわああつ！…」

「「クツパ！？」」

慌てて俺たちはクツパに駆け寄つた。……なんてひどい傷。たつた一発でこれほどの威力があるなんて！ くそ、よくも！

一矢報いてやるうと振り返つたが……いない。どこ行つた！？

「ゲヒヤヒヤヒヤ！…」

いきなり背後から響いたゲラコビツツの笑い声。いつの間に後ろに回り込んでたのか！？

「次はお前たちの番であーるる！…」

まだ国境すら越えてないのに、こんなところで負けてたまるか！  
せつせつと「付けるつ！…」

正直言つと……俺たちは苦戦していた。

あいつの攻撃中の癖を見抜いたクツパのアドバイスも受けたが……それでも、どうしても決定打は与えられない。

どうにかヘルメットを踏み壊しても。あいつが「いらっしゃい！」と唱えるたびに、すぐにどこからともなく新しいヘルメットがあらわれる！

それでも諦めずに、俺たちは何度もあいつに攻撃を加えていた。と、その時。またしても、ゲラコビツツが「ゲヒヤヒヤヒヤ！…」と笑いだした。

「な、何がおかしいんだよてめえ！」

「もう充分なのであーるー！」こんなといひで道草食つてる暇はないのであーるー！」

「えつ！？ そ、それつて……」

ルイージが言い終わるより早く、ゲラコビツツは空高く飛びあがつて、そして……

甲高い叫び声とともに、大量の攻撃弾を船にばらまいた！

「うわあああつ！」「

慌てて俺たちは船の上を駆けまわる。直撃は免れたが……やばいぞ、このままじゃ！

「ゲーヤーヤーヤーヤー！」

そんな俺たちの姿を面白がるみたいに、最後に笑い声を一つ残して。

ケラービッツはケラケモーナを追いかけて夜空に向ひて飛び去つて行つてしまつたんだ。

「あ、くそつ、待ちせがれこの野郎!!」声を返せ――!!  
「駄目だよ兄さん、間に合わない！…………って、うわ――!!」

爆発がどんどん激しくなる。

### 第3話 犯人現る！【Mario Side】（後書き）

マリオ視点。

前回まで間をあけていた行間を詰めてみました。  
どちらが読みやすいかな？

## 第4話 大魔王・ホッスイー【Lori Side】

「う、うう～ん」

気がつくと、僕は地面の上に投げ出されていた。夜空のような紫色の地面の上で、色とりどりの星型の石がぴかぴか光つて、とつても幻想的な場所。ここが、キノコ王国とマメーリア王国の国境にある平原、星くずヶ原……。

近くには、キノコ型のランプがついた橋と、崖にへだたれた緑色の大きな建物。建物の反対側に見えるのは、緑色で顔のような形をしたランプの橋。ちょうどここからが国境のすぐそばみたいだね。

あ、そうだ！ 兄さんやクッパは！？

ボクは急いで起き上つて、あたりをきょろきょろと見まわしながら、叫んだ。

「兄さん！ クッパー！！ ……って、ああっ！」

地面に埋まってる、見なれたオーバーオールと赤いシャツ……兄さんだつ！ ボクは慌てて兄さんの傍に駆け寄つた。

「に、兄さん大丈夫！？」

「……」

返事はなかつた。……よく考えたら当たり前だけど。

「今出してあげるからね！ セーの、ん～つ」

兄さんの足を掴んで、力を込めて思いつきり引っ張る！ 数回その動作を繰り返すと、すっぽりと兄さんの体が地面からひっこ抜けた！ その勢いで、ボクは仰向けに倒れこんでしまつた。

あれ。兄さんがいない？

「あらよつと！」

「むぎゅつ」

「ん？ 今ルイージに助けられたような……わ、地面が揺れてる」  
思いつきり踏んづけといて、ひどいや兄さん……。

兄さんを弾き飛ばすように、ボクはどうにか自分の力で地中から

飛び出した。

「うわ！……なんだ、そこにいたのか」

「いたのかつて……まあお互い無事だからいいけどね」

「あれ、クッパはいないのか？」

「うん、ボクが見たのは兄さんだけ……あ！」

兄さんにそう聞かれて、もう一度確認しようと周囲を見回したボクの目に飛び込んできたのは、倒れている数人のクッパの手下たちだった。ボクたちは慌てて駆け寄った。

「大丈夫か！？」

「か、カメジエットの……ローンの返済が、まだ、なの、に……」  
全身ボロボロになりながら、息も絶え絶えに、喉から絞り出すよううにそう言うノコノコ。ローンつて……どんだけコインつぎ込んで作つたんだ、つて言うのが分かるなあ。ゲラゴビツツのせいで粉々に吹つ飛んじやつたし、これはお氣の毒としか言えないなあ……。  
……つて、クッパ軍団の事情はどうでもよくてつ。

「クッパは？ 誰か見なかつた？」

「……く、クッパ様は国境の向こう側へ落つこちてしまわれた……」

「クッパ様を見つけ……お……助け、しる……」

ボクたちにそう教えてくれた他のノコノコたちも、全身傷だらけでなんだかとつても苦しそうだつた。だ、大丈夫かな？

「国境の向こう側……分かつたよ。きっとボクたちが探し出すから」

「……オレたちが助けなくたつて、あいつなら大丈夫だろー。あいつ、ゴキブリ並みの生命力なんだから。一応探しといてやるけどさ」  
兄さん、それつてクッパのことすつこく信頼とか心配してるように聞こえるよ……。

「まあ……そうだけど。でも、クッパはともかくこの人たちほつといて大丈夫？」

「さつきの理屈で言えば、クッパの手下であるこいつらだつて平氣だつて。見た感じ、命にかかるような大けがでもないしさ。後はこいつらで何とかするさ」

「……そう、だね」

兄さんは数多くの副業のひとつで、お医者さんをやつてる。その兄さんがそんな風に言うんだから……大丈夫、なのかな？ 本職は配管工なんだけど、いつもピーチ姫のためにあちこち動いてるせいで、忘れられがちなんだよねえ。

「とりあえず……まずは国境を越えないと」

「そうだな」

こんなところで話し込んでいてもしょうがない。ひとまず、ボクたちは近くの建物へ向かうことにした。

入国手続きは、縄跳びみたいなゲーム感覚のものだつた。でもボクたちはジャンプするのが仕事みたいなもの。難なくクリア！ 地図でもらつちゃつたし、言うことなし。ピーチ姫を助けるための準備は万全！ でも、その前にまずはクッパを探さなきや。

それにしても、ここは色とりどりの星くずがきらきら光つて、とつてもきれいな場所だなあ。兄さんは、他の場所でもこんな光景を見ていたのだろうか？

「……ん、おい！ あれ見ろよ」

突然、先頭を歩いていた兄さんが声を上げた。何だらう？

「え、何？ ……あつ」

近くの高台に置いてあつたのは、クッパの城とかで見るよりちょっとびりサイズが小さい大砲。それに……クッパがはまつてる！？ うわ、大変だ！ 慌ててボクたちは大砲の傍に駆け寄つた。

「それ！」

兄さんがジャンプして、大砲をぐるりとひっくり返す。大砲の口から、いつも通りの怖い顔がひょっこりとのぞいていた。やつぱりクッパだ！

「だ……大丈夫？」

「おおっ！ マリオ！ いいところに来たぞ！ は、早く我輩をこから出すのだ！」

「んなこと言つたつてなあ……」

兄さんが困つてゐる。ボクも困る。クッパみたいな巨体を、体にがつちりフィットしてゐる大砲から引つ張り出すなんて力、ボクにも兄さんにもないしなあ……。さすがに点火するわけにはいかないし。一人して頭をひねつてゐた、その時。

「ケケケケケケケケ！」

甲高い笑い声と共に、突然何かが空から降つてきた！！！て、敵！？

身構えたボクたちの前でケラケラ笑つてゐるのは、クッパと同じくらいの巨体をした、緑の体に赤いトサカのなんだか妙な生き物だつた。

ひとしきり笑うと、妙な生き物は、馬鹿にするような口調で言つた。

「大魔王クッパともあろつ者が大砲の中に落つこちるなんて、なんてザマだい！！」

「き、貴様何者だあ！？」

「ケケケケケケケケ！！ ワシはこの星くずヶ原の大魔王、ホツスイ

ー様だ！」

クッパ以外にも大魔王なんていいたんだあ……見た目は結構弱そうだけど。

「お前の噂は聞いてゐるが、大したことないではないか！ ケケケケケケケ！」

大砲にはまつたその姿を見ながら、おかしそうに笑つてゐる。クッパのほうは……カンカンに怒つてゐる。

「ケケケケケ！ もしそこから出して欲しかつたら、ワシにコインを渡すんだな！ フインを全部渡せば自由になれるゾ！ この恥ずかしい出来事も、秘密にしておいてやるゾ！」

「うわ、交換条件にコインを出してくるなんて！ がめつい奴だな

あ。

「……く、悔しいぞ 悔しいぞ！」

「大魔王のくせに泣くなよ、もー！」

あーあ、悔し泣きしちゃったよ。兄さんが呆れてる。

「コインかあ……具体的にいくらぐらい必要なんだろう。場合によつては、キノコ王国に引き返さなきゃダメかな？」

と、思つた時。兄さんが、懐からずつしりしたコイン袋をとりだした。え、それって……！

「なあ、これ全部じゃ駄目か？」

「なに？」

ホッスイーが目を丸くしてる。ボクはもっこりしたけど！

「ええっ！ 兄さん、それキノじいから貰つた旅費！！」

「大丈夫大丈夫、またすぐ溜まるつて」

もー、また考えなしに行動するんだから、兄さんつてば。でも、困つた人を見て放つておけないのは仕方ないよね。ボクもそうだもの。

すると、今まで食い入るように袋の中身を見ていたホッスイーが、突然笑い出したんだ。い、嫌な予感……。

「ケケケケケケケケ！ こりや、キノコ王国のキノココインじゃねえか！ ここはマーリア王国だぜ！ 外国のコインは両替しないとな！」

「え。マジで？」

兄さんが固まってる。

懐から電卓を取り出して、ホッスイーはなんだか楽しそうに計算を始めた。

「え、本日の為替レートでは、キノココイン100枚はマーリアコイン10枚ナリ<sup>かわせ</sup>！」

「ええっ！？」

「たつた10分のーかよ！？」

「たつたコイン10枚なら、この秘密をうつかりバラしちゃうかも

ナリ～。ケケケ」

え～、クッパの秘密のほうが大事なのかなあ。ボクたちにとつては、他にも色々大事なことがある。このまま足止めされちゃ、ゲラゲモーナたちがまた動き出すかもしれない。それに、今頃キノコ王国はどうなってるんだろう……。

ボクとしてはコイン10枚で押し切りたいところなんだけど、ボクたちのすぐ隣で涙ちょちょ切れるクッパを見ると、このまま知らんぷりつてのは出来ないよねえ。そしてそう思つてるのは兄さんも同じみたいで、クッパとホツスイーを代わる代わる見ながら「うーむ」って唸つていた。

そんなボクたちの考えを、そのまんま見透かしたみたいに。

「……ということで、マメーリアコインをあと100枚！！　この星くずヶ原で集めて来たら、クッパを助けてやる！」

そう言つて、星くずヶ原の奥地へ繋がる橋を出現させた。

「……仕方ない。急ぐぞ、ルイージ！　モンスターどもから、片づけからぶんざる！」

「う、うん。ブロツクに入つてのも忘れないでね……」

急いで、ボクたちは今来た道を引き返したんだ……。

「コイン集めは、驚くほど順調に進んだ。

星くずヶ原に住む不思議な二人組・星かげ兄弟から、とつても便利な技を教えてくれたんだ！　これで、この地方の旅もぐっと楽になるよね！

またずつしり重くなつたコイン袋を抱えて、ボクたちはホツスイーのもとに戻つて來た。

「これでいいか？」

「ケケケケ？　ふふーん、やるじゃねえか！　それじゃ、100枚と言わざ「コイン全部貰うぜー！」

「は、早くここから出すのだ～つ」

よつぽど待ちくたびれたらしい。またクッパが泣き出した。兄さ

んの手前、大魔王としてのプライド捨てりや色々まあいんじやないかなあ……かつこ悪い。

そんなクッパの叫びを聞いて、ホッスキーは、にやけた田玉をまん丸くして、こう言ってのけたんだ。

「え？ そこから出す？ お前を助ける？ なんのことだい？」

「「んな……つ」」

うわ、そんな堂々としらばっくれるなんて！ 最初から、クッパをダシにボクたちにコイン集めさせるつもりだつたんだ！ なんてする賢い奴だろう。ボクも兄さんもあいの口がふさがらなかつた。だらしなく垂れ下がつていたクッパの目が、一気に釣り上つた。

「騙しやがつたなあ～！！」

「ケケケケケケ！」

おかしそうにいつもの調子でげらげら笑うと、ホッスキーはボクたちの目の前まで飛んできた。体がさつきより膨らんでるように見える。それに……なんだか殺氣みたいなものも感じる！ 戦うのか！？

「「こにはもうキノコ王国じやねえんだ！ よそ者はひとつと消えな！！」

「……そつはいかないよ。ボクたちは、この国でやうなきやいけないことがあるんだ！」

「おう、そういうこつた！ そこときな、この守銭奴大魔王！」

戦いは始まつた。

まだ入国したばっかりだつて言つのこ、こんなところで道草食つてる場合じやない。

早く片付けて、ゲラゲモーナを追いかけなくちゃね！！

自ら「大魔王」と名乗るだけあつて、ホッスキーはなかなかの強敵だつた。もうちょっと戦いが長引いていたら危なかつたかも。でも！ こつちだつてちょっとだけ強くなつてる！

星かげ兄弟に教わつた必殺技が、こつちにはあるんだからね！

「行くぜ、ルイージ！」

「うん！……ブランザーアタック！！」

「スプラッシュュ・ブロス！！」

ボケと兄さん、一人分の体重を乗せた体当たり！ ホッスイーの

思ひ上三の時。

תְּלַבְּדָהִים = אֶמְרָמִים בְּלֹא בְּלֹא. עַמְּלָה

うわ、いきなり地面の下から声がした！？ そういう

に、星ぐずヶ原でよく見る星型のハツチがあつたよね？

二、黒石見合せにあつて馬が死んで死の靈が附いたる。

星方に別荘の緑の山に星方に宣露方現林が苗木に  
ヨリミフノフノロツニラソモホツニラソモホツニラソモ

怒り心頭つて感じの星かげ軍曹は、クッパがはまつてい

横倒しにして、手に持つていた葉巻をつけて……大砲の導火線に点

卷之三

「うわ、ちよ、やべー！ おい待てってーーー！」

「ねえ、どうして、星か月、車酔い!?」

かたの叫びにあがり、星かに宣讀にささるが、元の

「ま、マリオ～！！ 緑のヒゲ～！！ ピーチ姫の声を、必

戻すのだ！後は任せたぞ！

という、涙交じりの叫び声と共に。大砲から発射されたクツバは、倒れていたホツスイーを吹っ飛ばして、星くずヶ原の向こうへ飛んでつてしまつた。 。 つて、だからボクは『縁のヒゲ』じゃない

つてば！！

……あちやー、さすがのケツバでも、あれはヤハいたる

助けに行つたほゝかしのかな？」

卷之三

……あ。

そういうえば、ホッスイーと戦つ前にさつさつた気がする。

「でも、だからって」

「いいんだよ。あいつもオレたちに任せてくれたんだし

そう……なのかな?

でもまあ、いいか。これで、よつやく星くずヶ原を抜けられそう

だしね。

よつやく冒険がはじまるんだ!

手掛けかり、早く見つかるといいね。兄さん!

「さつきのあれ、かつこよかつたぜ」

「え……へへへ。ありがと」

## 第4話 大魔王・ホッスイー【Luigi Side】（後書き）

今まで漢字だったマリオ・ルイージの一人称をカタカナにしてみました。変換がめんどくさいですが（オイ）、これはこれでいいかも。

さてさて、星くずヶ原編・ルイージ視点です。

もしあそこで戦闘にならなければ、ふたりは延々とコインを集めさせられる羽目になつていたのでしょうか……。w

ちなみに『副業のお医者さん』＝『ドクターマリオ』です。  
分かる人いるかな？w

## 第5話 ウフ村、足止め、ハンマー兄弟【Mario Side】

「うわああ……！」

洞窟を出た瞬間、ルイージが感嘆の声を上げた。

うん、その気持ちは分かるぞ弟よ！ オレも、喉の奥からそんな声が出かかったからな！

ここは、山に囲まれた静かな所なんだが……それよりも田を引くのは、山の上からこうごうと流れる滝だった。

流れ落ちる滝の水しぶきに、いつの間にか昇っていた太陽の光が当たつて、きらきら輝いて。

なんというか……豪快だけど、美しい……つていつのかな？ オレにはこういう芸術的な感性はないけれど、この景色はすごくきれいなものだつていうことぐらいは、すごくよく分かる！

しばらく、その景色に見とれながら歩いていた時だった。

「くせものだ——！」

「——へ！？」

切羽詰まつた怒鳴り声で我に返つたオレたちが、声のした方を見てみると。

鎧を着込んだ人たちが、凄い形相でこっちに向かって走つてくるじゃないかっ！

彼らはあつという間にオレたちを取り囲むと、すごい勢いでオレたちに迫つてきたんだ。

「つ、ついに見つけたぞ！ マメリック王子をどこにやつた！？」

「お前たちが、我が国のマメリック王子を連れ去つたに違ひない！」

「目撃者もいるんだ！ 素直に白状せい！！」

「ええ！？」

「ちょ、ちょっと待つてくれよー！」

慌ててオレたちは声を荒げた。

マメリックとかいうのが誰だか知らないけど、何が何だか分からな

「うちに誘拐犯なんかされてたまるか！」

「オレたちはキノコ王国のマリオとルイージだぞ！ オレたちが誘拐なんかするわけないだろ！」

「それにボクたち、ついさっきマメーリア王国に来たばかりなんですよ！」

「何だと？」

鎧の人が眉をひそめる。……けど、その顔はすぐに元通りの怖い顔に戻つて。

「嘘をつけ！ キノコ王国のスーパースターが、こんなところにいるはずがない！」

「いや、だから本当だつての！」

「うーん、駄目か。こっちの話を聞く気はなさそうだ。

「こっちも無駄なバトルはしたくない。最終手段、自慢の華麗なジャンプでも見せてみるか？」と思つた時だつた。

突然空のほうから、バサバサバサ、と、何かが飛んでくる音がしたんだ。見上げて……びっくり！ ホツスイーじゃないか！？ ……オレたちが痛めつけたせいで、体じゅうに包帯ぐるぐる巻きの痛々しい姿だつたが。

「ケケ ケ ケケ ケ……そいつら、嘘ついてないぞ……」

「何？」

「なんでも、ゲラゲモーナという奴を追いかけて来たそだ……。

見かけより強いぞ……」

つて、何で知つてるんだこいつ。オレたち、あいつと戦つてる最中にそんな事言つたつけ？

星くずヶ原の方角へ飛び去つて行つたホツスイーを見送つた後、再びオレたちに向き直つた兵士たちは、さつきまでの緊張した表情がとれていた。

「……こ、これはこれは。失礼致しました」

お、その口ぶりからすると、疑いは晴れたな。よかつたよかつた。

「実は、この国のマメック王子が何者かに連れ去られたらし……」

「どう連絡が、この先の『ウフ村』からあります……犯人の手掛かりを探していったのであります」  
なるほどな。それで、見なれないオレたちを真っ先に疑つたわけだ。

「ん？ そういえば。

「さつき、田撃者がいるって言つてたよな？」

「あ、そうだね。あの、どんな人だつたか聞いてますか？」

「ああ、はい。田撃者によると、マメック王子を連れ去つた犯人は

「……

「変なヘルメットをかぶつて、「るるる」と喋るヤツ……らしいです」

「……ん？」

「それってまさか、もしかして……！」

「何か気がついたことがあつたら、我々に知らせて下さい」

「調査再開！！」

「あ、ちょっと……！」

オレたちが止める暇もなく、兵士たちは村のあちこちに散つてしまつた。……あっしゃー、すんごい手がかり、オレたち持つてんのに！

「あの人たちが言つてる犯人つて……間違いなくゲラゴビツのこじだよね」

「ああ。今のところ、あいつしか当てはまらないな」

「の人たちで、捕まえられるのかな？ クッパですら敵わなかつたのに……」

「……うーん」

ルイージの言つてることは、まあ、正しい。いつもボボコにしてるオレが言つのもなんだが、自ら『大魔王』と名乗るだけあって、クッパの実力は本物だ。そんなクッパを一発でブツ飛ばしたゲ

「ゴビツツを、彼らが捕まえられる可能性は……残念ながら、低い。仕方ない！ こうなつたらオレたちでとつ捕まえて、ゲラゲモーナの居場所を吐かせて、王子も返してもうしきないか！」

「とにかく、村に行こうぜ！」

「うん、そうだね！」

村人の話によると、マメック王子が連れ去られたのは、この村がある「ウフマウンテン」の頂上付近が怪しいらしい。でも、そのウフマウンテン頂上につれて行つてくれるっていう翼竜・プスラノドンが、最近なかなか帰つて来ないらしいんだ。

だつたら自力で登るしかない！ と登山道のほうに行つてみたら橋が修理中だつた。……タイミング悪すぎないかオレたち？ その橋の近くには、双子のハンマー職人も住んでるらしいが今は家にいなかつた。さあ、どうしたもんか？ 途方に暮れて、オレたちは下山道付近をさ迷つていたんだ。

その時だつた！

「マ、マメック王子を返せーーー！」

「ーーー？」

悲鳴に近い叫び声がして、オレたちは反射的にそつちに向かつて走り出す！

「……あれば！」

「げ、ゲラゴビツツーーー？」

兵士の声になんか耳も貸さず、彼と向かい合つていたゲラゴビツツは……オレたちを散々な目に遭わせたあの縁の攻撃弾で、兵士を容赦なくブツ飛ばした！

おかしそうに笑つてる……。くそ！ なんて奴だ！

「なんて酷いことを……」

「くつ……おい！ ゲラゴビツツーーー！」

「ん？ ……んげげ！ …！」

オレの声に反応して、ゲラゴビツツが振り返つた。オレたちの顔

を見た途端、ひどく驚いてる。ふふん、やまあみる。

「お、お前たち！ クッパと一緒に吹き飛んだばずるー。」

「へへん。残念ながらこの通り元気だぜ」

「ふ、ふーむ……ワレがマメリック王子で手にすりついていた隙に、すつ

かり追いつかれたるねー！」

やつぱり！

マメリック王子をやられたのは、じつだつたんだな！

「ふるるるるるー。しかしグラグモーナ様は、マーリア城です  
でに次の作戦開始中るー。」

「何だつてー？」「

「どうせお前たちは間に合わないるけど、念の為……」

そこまで言つて、突然グラグモーナは空高く飛び上がった！ 来

るか？ それとも逃げるー？

身構えたオレたちの頭上に、ふつと大きな影が差して……

「ここで足止めるよーつー！」

「なつ……兄さん、上つーー。」

「え？ ……つて、うわあつーー。」

ルイージの声で、反射的にオレは後ろへ飛ぶ。……そこへ！ い  
きなり、自分の身長なんか田じやないほどでかい岩が振ってきたん  
だ！！

下山道が完全に塞がれてる。このままじゃ、グラグモーナがいる  
つていうマーリア城には行けないじゃないか！ くつそー、よく  
も！

「ふるるるるるー。この岩がある限り、お前たちはこの山から下  
りられないるー！」

その声を最後に、岩越しにジェット噴射の音が聞こえた。空の彼  
方へグラグモーナが飛び去つて行くのが小さく見えた。……逃げら  
れたか、くそ！

「ど、どうしよう……先越されちゃったよ」

「あークソ、家からハンマー持つてくればよかつたつー！」

「家飛び出したの突然だつたし、準備する暇なかつたもんねえ……ん？ ハンマー？」

「どうした？」

お、オレの言つたことになんか問題でもあつたのか？

しばらく考え込んでいたルイージが、突然ぱつと顔を上げて、オレに何だか嬉しそうに食いついてきたんだ。

「それだよ、兄さん！ ハンマーだよ！ さつき聞いたじやないか、双子のハンマー職人がこの村に住んでるつて！ もしかしたら、家にあるのよりいいもの貰えるかもしれないよ！ それでこの岩、壊せるんじゃないかな！」

「おお、その手があつたか！！！」

なるほどな。さつすがオレの弟だ！

帰つてきてたらいいけどなあ。さつそく、オレたちは元来た道を引き返した。

「「めんぐださーー」」

「お、お邪魔します」

恐る恐る、家のノレンをくぐる。

お、いたいた！ 緑色の顔をした、頭でっかちの二人組。作業台に乗つた丸つこい石を前にして、なんだか難しい顔をしている。……まづい時に来ちまつたか？

「「」これが最後の石だよ！ ハンマー兄弟の意地を見せるがよ！」

「一筋の望みを、この石にかけるだよ！」

気合を入れるよつにそう言つ一人の体が、突然ふわりと浮かびあがつて。

突然、ふたりは自分の頭を使って、題の上の石をがんがんと叩き始めた！ 「」これがハンマー作りに必要な工程なのか？ 痛そうだなー。

その動作を何度か繰り返した後……作業台の上にあつたのは、無残にも粉々になつた石だつた。……失敗したのか。

ふたりが、息を切らしながらがつくりと肩を落とす。

「やつぱりこんな石じや駄目がよ。むつハンマーは作れないがよ……」

「ハアハアハアハア……ん？　おめーら、こんなところで何ボケーッと見てるだ？」

「え、あ！　勝手に上がつてすみません！」

慌てて、オレたちはふたりの側に駆け寄った。

「あの、色々あつて……ハンマーを作つてほしいんですけど」

「ああ、あんた達が凄腕の職人だつて聞いてさ」

「ん、何？　ハンマーを作つてほしい？？」

緑の服のじいさんが、何だか疑わしげにこっちを見てる。いきなりこんなこと頼みに来て、さすがに疑うよなあ……つていうか、何でこっちに来てから、オレたち疑われっぱなしなんだよー！

と、その時。赤い服のじいさんが、何かに驚いたみたいに、小さくジャンプして言つたんだ。

「ほー、オラ、こいつら知つてるだよ！　キノコ王国のマコオヒルイージがよ！　ジャンプとハンマーの達人がよ！」

「……あー、そうだよ！　そうだよ！　オラも思いだしだよ！」

おつ、良かつた。信じてくれたみたいだな！　さつきの兵士も言つてたけど、オレたちって結構名前知られてるんだなー。オレはただ、騒動に首突っ込んでただけだつていうのに。いくら隣国とは言え、ここ、キノコ王国からは結構離れてるはずなんだが。

と、ちょっとぴり優越感に浸つていた時。緑のほうのじいさんが、首を傾げてオレたちに聞いてきたんだ。

「そんな有名人が、どうしてこげなといいで、ハンマーが必要になつただ？」

「あー、それは……」

「あ、いや……事情は言わんでええがよ」

説明しようとしたオレを、赤いじいさんがさえぎつた。

「理由は聞かねーで、頼まれた物をきつちり作る。それがプロつて

もんがよ

「……そつだつただよ」

「おお。なんかかつこいいなあ、そういう考え方。

「それじゃあ、作ってくれるんですか?」

「ああ……だども、ハンマー作りの材料には、山の頂上にある『オホホブロック』つちゅうせきが必要だよ。それが、突然プスラノドンが戻つてこなくなつたで、頂上に行けなくなつただよー。」

ああ、そう言えばそんな話、村人が言つてた気がするなあ。

「オホホブロックは固い石でよ、この石から作るハンマーならどんな固い物でも壊せるがよ!」

それそれ! そういうのを求めてきたんだよな、オレたちは! そのハンマーなら、下山道をふさいだあの辻つじだつて、やつと壊せん!

でも、今はそのハンマーを作るための材料がないんだよな……。

「オホホブロック取りに山の上うへを登りたいけどよ、ジャンプが上手くねえから無理だあ……」

なるほどな。それで、今持つてゐる石だけで、どうとか仕事しうりとしてたんだ。でも、やっぱりそれは失敗に終わつたと。

……うん! こんな時この、オレたちマリオ、ブラザーズの出番だよなー!

「ジャンプなら任せとけ!」

「ん? ああ、そうか。オメーら、ジャンプのプロだつたな」

「ちゅー事は、山の頂上うへを行つて、オホホブロックを取つて来てくれるつちゅー事がや?」

「はい! ボクたちに任せてくれ!」

おお、よく言つたルイージ! 考えてたことは同じだつたんだなー。まあ、どうにしても、山登りはするつもりだつたんだ。何しろ、山の頂上うへはマメック王子マメックおうじが連れ去られたつていう方向らしいからな。

それに、プスラノドンとか言つ恐竜も探してやらないと!

オレたちの言葉を聞いたハンマー兄弟の顔が、たちまち笑顔にな

つた。

「それは助かるだよ！ オホホブロック取つてきてくれたら、特製ハンマーを作つてやるだよ！」

「持ちつ持たれつだよ！」

ハンマー兄弟、カナンビズッチの家を出ると、ちゅうじ橋の修理も終わっていた。

よーし、さっそく登山開始だ！

見てるよー、ゲラコビツ。絶対ハンマー手に入れて、あんな昔すぐに粉々にしてやるんだからな！！

## 第5話 ウーフ村、足止め、ハンマー兄弟【Mario Side】(後書き)

ウーフ村編、マリオ視点です。

マリオの口調がどんどん不良になつて行く……w

さて、次回はいよいよあの人気が登場ですかね？

## 第6話 プスラノドンとマメリック王子 【Lion King】

喋る石像みたいなのがけしかけて来た『試練』をどうにか乗り越え、ボクたちはついにウツマウンテンの頂上までやって来た。

近くに望遠鏡が設置されてて、興味にひかれてボクはのぞいてみる。……うわあ、いい眺め！

星くずケ原もよく見える。深い森、怪しげなお屋敷、南の島、氷の海……あ、緑の屋根の大きなお城も見える！ あれがマメリック城かな？ ……ゲラゲモーナは、今頃あのお城の近くで、ゲラゴビツツと一緒に何かろくでもない事を企んでいるんだろうか。

「おーい、いつまでも見とれてないで。早くオホホブロック回収しよ！」

「あつ……！」めん。そうだね」

兄さんの声ではっと我に返ったボクは、慌てて望遠鏡から田を離して、兄さんの傍に駆け寄る。

山の頂上は、大きな湖のようになっていた。あちこちに小さな川が出来ていて、崖の下まで流れ落ちている。あれが、ふもとの滝に繋がっているんだね。

で、その湖の真ん中には、小さな紫色の丸い石がいくつも積み重なって、小島が出来ていた。その石の一個一個に、橿円だいの丸い模様が3つあって、それはよく見ると人の笑顔のように見えた。……ああ、だから『オホホブロック』って言つんだね。よく見ると、表情も少しづつ違うみたい。面白いなあ。

でも、それより田を引くのが……小島の上にビビーんと陣取るオホホブロックの親玉？ っぽいでかい岩と、その上でうつ伏せになつているオレンジ色の恐竜だつたんだ。

あれ？ そう言えば村で、何か気になる話を聞いたような……。

「ねえ兄さん……」の恐竜、もしかして」

「ああ、オレもやつ思つてた。ん……よく寝てるみたいだし、起きたら話を聞こつかせ」

「うう、兄さんがオホホブロックの山のけいの一個を拾い上げようとした時だつた。

「『ハハ――――つ――』

「「つわつ――?」

「きなり耳をつんざくような怒鳴り声に襲われて、ボクたちは思わず飛びあがつた。お、起きてたの！」

「『』にある石は、とても珍しい『オホホブロック』といつぱぢり！ 勝手にオホホブロックを持つて行くのは泥棒どりー！」

「あつ、『』『めんなさい』

「い、いろいろ事情があつてさ、その」

慌てて弁解しようとするものの、恐竜の視線は険しいものだつた。ウフ村に着いたころの一軒といい……『』の王国に来てから、ボクたち疑われっぱなしよおー。

とりあえず、起きたんならいろいろ話を聞かなくちや。村人の言った通りなら、きつとこの恐竜は……。

「えーと……とこひで、お前誰？ 名前は？」

「え？ オラの名前？」

恐る恐る、とこつた感じで兄さんがそう尋ねる。まだ険しい表情は取れないうけど、恐竜は少し首をかしげながらも答乗つてくれた。「オラはプラスラノドンつていうどりー！」

やっぱり！ ボクと兄さんは顔を見合わせ、頷きあつ。

「村のみんなが心配してたぜ。お前がさつぱり戻つてこないからつて」

「え？ それは悪い」としたどらー！」

続けて兄さんがそう言つと、プラスラノドンは申し訳なさそうにそう言つた。険しい表情は取れてる。……一応、信用してくれたのかな？

「マメック王子を見かけて『』まで追いかけてきたら……『』、元気だ

いつの間にかこんな大きな卵があつたぢらー。びっくりぢらー。」

そこで一旦言葉を切つて、プスラノドンは今自分が座つてゐる岩

……じゃなくて卵を、自分の翼で撫でながらまた続けて言つた。

「オラ、ここでこつして卵をずっと温めていたぢらよー。もうすぐ中から何かが生まれるぢらー。」

「……おいおい。こんな卵より王子の事のほうが重要なんじゃないのかよ。」

「つていうか、これ卵なんだ。ボクにはおつきな指の塊にしか見えないんだけど……。」

呆れる兄さんに同意するようにそう呟いて、ボクは改めてプスラノドンが「卵」だというそれを見上げた。オホホブロックを更にゴツくしたような感じのその卵。中でぼんやりと赤い光を放つていて、どくどくと脈打つような音も聞こえる気がする。……なんと言つか、ものすごく怪しい。

大丈夫なのかなあ、と思つてた、その時！

いきなり、卵が大きく揺れ始めたんだ。衝撃波みたいなもので、近くにいるボクたちも思わずよろめいてしまつ。

「うわ！？」

「おつ！ 来たどら！ 生まれるぢらー。」

「ちょ、そんないきなりつ。」

卵の表面にぱきぱきとひびが入つていく。

やがて、卵の殻を思いつきり破つて……中から出てきたのは。

「グギヤ————ツ————！」

プスラノドンよりももつとでつかい恐竜だつたんだ！ 吼える声も体格も、生まれたてとは思えないほどすごい迫力で……や、やつぱり厄介な生き物の卵だつたんぢやないかつ！

卵が割れた衝撃で、オホホブロックがいくつか滝の下に落ちていく。家に直撃とかしてなきやいいけど……つて、今心配しなきやい

けないのはボクたち自身のほうだよおつ。

「な……つ」

「うわああつ、何これつ」

「びっくつビラ… とんでもない卵だつたビラ…！」

その時、恐竜が口をもじもじしながら「スラノドン」がいる方を向いて……口から、炎をまとつたオホホブロックを、「スラノドン」曰がけて吹き出した！

避ける暇もなく、まともにそれを喰らつた「スラノドン」は、空の彼方へ吹つ飛ばされて行く。

「ああつ、「スラノドン」…！」

「つたくしょーがねーなあいつはつ！」

ボクたちが「スラノドン」の無事を確認する暇もなく、恐竜は卵の殻から飛び出して、ボクたちの目の前に着地。それでもう一度「グギャーーーーーツ！」と吼える。

「ううう、すゞい声……！ 耳がびりびりするつ。

「こりや本氣でからなきやな。やるぞ、ルイージ…！」

「え、あ……分かつたよつ！」

兄さんの命図で、ボクは慌てて戦闘の構えを取つた。

恐竜が口から吐いてくる攻撃弾は厄介だつたけど、こっちにだつて「ラザー・アタック」っていう必殺技はある。勝てない相手じゃない！

それにあんな弾、カメジエットを墜落させた「ラ・レッジ」のあれに比べたら、大した攻撃じやない……よね？

「体当たり、行くよー！」

「よつしゃあ！ ラザー・アタック！」

兄さんとしつかり手を取り合つて、恐竜の頭目がけて突撃する！

「バウンド・ブロス！…！」

ボクたち兄弟の渾身の一撃をくらつて、恐竜が悲鳴を上げた。そろそろ倒せるかな…？

と、思つたその時だつた。突然、恐竜が大人しくなつて……その体が虹色に輝き始めて。体の大きさも、戦つていた時とはまるで違う大きさまで縮んでいく！

やがて、光がおさまつた時。

そこには、きれいな服に身を包んだ、金髪のちょっとハンサムな男の人気が立つていたんだ。

「えつ、え……？」

「お、お前は……」

戸惑うボクたちをよそに、優雅に着地したその人は、「フフフ」と笑みを浮かべながら金髪をさらりとかき上げる。その仕草はきらきらとまぶしい金色の光を放つて、そして……

「君たちのヒゲに乾杯！」

「……うわあ、なんか気品があつて、すつじくかつこいい！……あれ？ 兄さん、何でそんな苦虫噛み潰したみたいな顔してるの？」

「……胡散臭え」

「ぼそりと呟いたのが聞こえた。……確かに、兄さんこういう人あんまり好きじやなさそうだもんなあ。

その時、ばさばさと羽ばたく音が聞こえた。これはもしかして！「ブスラノドン！ 無事だつたんだね」

よかつた。ボクたちが戦つてる間に、ちゃんとここまで戻つてくれたんだ！

ボクたちが安心しているのも構わず、ボクたちのほうを見て固まつていたブスラノドンが、やがて口を開いた。

「こ、この無駄に輝く人は……マメック王子ど……」

「「ええつー？」」

「そうなのー？ 何だかやけに気品がある人だと思つてたけど、よりによつてあの行方不明になつてたつていう王子様だつたなんて！ つてことは、今までボクたち王子様と戦つてたんだ！ 完全に倒

さちやわなくつて良かつたあ。

「どうしてこんな事になつたどうーー？」

「……フフフ」

もう一度髪をかき上げる仕草をして、王子は笑つた。よく見ると、ホントにハンサムな人だな。

「まあ、いわゆるちょっととしたアクシデントってやつかな

「あ、アクシデント……ですか？」

「ある秘密の任務で國中を調査していたところ……この山で、ゲラゲモーナとその手下のゲラゴビツに、バッタリ遭遇してしまつて……。気がついた時には時すでに遅し。あんな姿にされ、石の中に閉じ込められてしまつたのさ」

そこまで説明して、王子は髪をかき上げる仕草をもう一度して見せた。あ、やっぱり卵じやなかつたんだ。……隣で「いちいち光るなつづーの」って兄さんが小声で毒づいてる……。

それにしても……この一件、やっぱりあの二人が絡んでたんだな。この国の王子様をあんな姿にするなんて……すごい力を持つてるんだ、ゲラゲモーナつて。許せない奴だつてことには変わりないけど、いつか戦うことになつたら……勝てるのかな、ボクたち。

でも、この国に住む悪い奴なら、私情で來てるボクたちならともかく、この人たちにとつても敵だよね！ なにしろ、この人は立派な被害者なんだから！

「あの。ボクたちも、ゲラゲモーナ一味を追つてるんです！」

「そりなんだよ。実は……」

マメーリア王国の偉い人と会える、めつたにない機会だと思つて。ボクたちは、ボクたちの故郷で起つた事の始まりを、王子に話して聞かせた。

「へえ……ピーチ姫の声が盗まれたのか」

「ええ、そりなんです。だから

どうか協力して下さい、と続けようとした時。『だからともなく、ソラマメに羽が生えたような不思議な乗り物が飛んできてる。王子はそれに飛び乗ると、ちちちち、と指を振る仕草をして、自信満々といった顔つきで笑って見せた。

「フフフ……ピーチ姫の事なら、心配しなくても大丈夫さ」

「え？ いや、そういうわけにも……」

「とにかく、ゲラゲモーナの後を追うべきだね！」

それはもちろん、その通りなんだけど。

でも、どうしてそんなこと言つのかな。ボクも兄さんも、姫の事が心配だからこそ、こうしてここまで来たのに。なんだか、ボクたちの知らない事を色々知つてゐる気がする……。

「山を降りたら、マーリア城にいるマメラ女王に会つて来て欲しい。恐らく、ゲラゲモーナの次のターゲットは、マーリア城にある！」

「！」

下山道を塞いだ時のゲラコビツツの言葉を、ボクはハツと思いだす。マーリア城で次の作戦開始中とかどうとか……。

あの事が、王子の言葉に繋がるんだとしたら。もつあまり時間はないはずだ！ 早く山を下りないと！

そう思つて、兄さんに声をかけようとした時。

「ボクからのプレゼント。マッシュクのサイン入り」

そんな台詞と共に、ボクの目の前に何かが落ちてきた。……黄色いバラだ。花びらに、芸能人の書くサインっぽい宛名がきれいに書かれている。

「緑の君は、黄色いバラがよく似合つね。そのバラを見せれば、マーリア城に入れるはずさ！」

えつ！？ そ、そんなこと言われるの初めてだよ。なんだか照れるなあ～。

どう反応したらいいべきか困るボクと、そんなボクたちの様子を見て呆れたように顔をしかめている兄さんを、乗り物の上から見下

ろしながら。もう一度、髪をかきあげてきらきらした輝きを、ボクたちの頭に焼き付けるように放つて。

「さて、ボクは任務に戻らねば……それでは、また後ほど……」

そう言い残して、王子は、空の彼方へ飛び去つて行つたんだ。

「しばらぐ、ボクも兄さんも言葉が出せなかつた。」

「ほわ~。びっくりしたー。手がかりいっぱい貯つちゃつたね」

「ああ……オレも内心びっくりしたぜ。まさかこんな所で一国の王子に会えるなんてさ」

そう言つ兄さんの視線は、ボクの手の中の黄色いバラに向けられていた。

「そいつがあれば城に入れるはずだよな。そつと決まれば、早く山を下りよつぜ」

「うん。オホホブロック、カナンさんたちに持つて帰つてあげなきや」

「そいつでハンマー作つてもらつて、あんな苗イチ 口口だぜー。」

「あ、山を下りるぢら?」

王子と戦つ前に手に入れそこねたオホホブロックをもう一度拾い上げたボクたちに、プスラノドンが声をかけてきた。

「え、何? まだ何かあるのかな。」

「長い道のりをまた下りてくのは結構大変ぢらよー。オラの足につかまるどら。ウフ村まで運んであげるぢつよ」

「おお! いいのか?」

「わあ、ありがとう!」

やつたね、それなら帰りは楽ちんだ!」

これでプスラノドンもウフ村に帰れて、村の人たちに心配かけずに済むよね!」

さあ、早くハンマーを手に入れよう。

そしたら、急いでマメーリア城に行かなくちゃ! 手遅れにならなこうちに!」

## 第6話 プスラノードンとマメリック王子 【LeBron James】(後書き)

ウフマウンテン編、ルイージ視点。無駄に輝く人の人、マメリック王子登場です。

ウフロスを楽しみにしていた方は申し訳ない。うだつだ長くなる事を考えカットしました。w

ゲーム中ではマリオもルイージもあまり喋ることはありませんが、王子との接点が特に高いのはルイージのほうなので、彼にとつての好印象を持たせてみました。

逆に、自分が書くマリオの性格だと、王子とはあまり相性良くなさそうだなあとか思っちゃつたりします。w

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3716m/>

マリオ＆ルイージRPG 兄弟の冒険日誌。

2010年10月8日10時30分発行